

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	英語における左方転移と名詞句の優位性の階層について（その2）
Author(s)	近松, 明彦
Citation	ニダバ , 20 : 82 - 89
Issue Date	1991-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00047222
Right	
Relation	



英語における左方転移と名詞句の 優位性の階層について（その2）

近 松 明 彦

[本研究では、どの文法関係を担う名詞句が左方転移され易いかを、調べている。前回は、主語、直接目的語、間接目的語、斜格目的語(I)について吟味してきた。]

2.3. 斜格目的語(II)から比較名詞句までの左方転移の可能性

2.3.1. 斜格目的語(II)からの左方転移

前節では、間接目的語と等価な前置詞の目的語(斜格目的語(I))を扱ったが、本節では、それ以外の前置詞の目的語(斜格目的語(II))の位置からの左方転移について検討したい。

(16)a. (4.00)I scratched the wire with a knife.(荒木(1986:VI.84(cf.)))

b. (1.58)A knife₁, I scratched the wire with one₁. (#9)

(17)a. (4.00)John washes his car in the garage.(荒木(1986:VI.102))

b. (1.72)The garage₁, John washes his car in it₁. (#10)

(18)a. (4.00)Mary received a book from John.(安井(1975))

b. (1.61)John₁, Mary received a book from him₁.

(19)a. (3.81)John made a recorder for his music lesson.(荒木(1986:VI.60))

b. (1.69)His music lesson₁, John made a recorder for it₁.

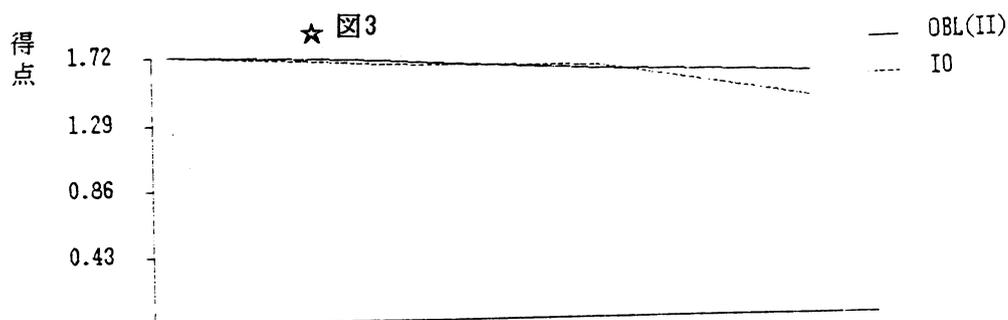
各用例において、それぞれ、(a)文が基本文、(b)文がそれに前置詞の目的語の位置で左方転移をかけた文である。例ごとで点数に相当のばらつきがあるが、前節で見た斜格目的語(I)の1.67という数値に近い値であると言える。

尚、(16b)と(18b)は他の例に比べて容認性が幾らか低く見える。これは前置詞句の動詞との意味的結び付きが強いためではないかと思われる。scratchの示す動作は道具を要求するように思われる。receiveの意味する動作は、受け取る対象が何処から来るのかを示すもの(source)を必要とするように思える。以上の意味的考察に対応して、(より厳密な吟味が必要だが)、統語論的には、これらの文法性の低い文における転移された前置詞句がcomplementである可能性がある。receiveはfromの句をcomplementとして取る。scratchの文におけるwithの句はcomplementとは言い難いが、それに準じた形で扱うことも出来るかも知れない。こうして、次の仮説を立てることが出来るかも知れない。

(20) adjunctは転移され易く、complementならば転移され難い。

この仮説は、しかし、斜格目的語(I)の比較的高い点数からの挑戦を受ける。というのも、斜格目的語(I)は間接目的語と等価なのであって、complementであると考えられるからである。但し、この斜格目的語(I)からの反例は斜格目的語(I)と斜格目的語(II)とが基本文を異にしている、その条件が一定でないことに帰することもできるかも知れない。しかし、ここではかかる形式統語論的な考察には深く立ち入らないことにする。

さて、図3を見ると、斜格目的語(II)が間接目的語とほぼ同じ得点であることがわかる。但し、横軸には文の番号が書かれるべきであるが、斜格目的語と間接目的語とで文の番号が異なるため省略した。最も得点の高い文がグラフの左端に置かれ、得点の高い文から低い文へという順に、左から右の方へ向けて配列されている。以後、☆の印が表示されているグラフは同様の方式に従う。



このグラフより、hierarchyは“主語>間接目的語,斜格目的語(I),斜格目的語(II)>直接目的語”ということになる。つまり、斜格目的語は、(I)も(II)も同じ位置にあることになる。故に、両者を区別する意味がないので、hierarchyは次のようにすべきであろう：

“主語>間接目的語,斜格目的語>直接目的語”。

2.3.2. 属格名詞句からの左方転移

では、属格名詞句の位置からの左方転移がどの程度acceptableであるかを見て行くことにしよう。

(21)a. (4.00)The explosion damaged the ship's funnel.(Quirk and Greenbaum (1973:4.71.))

b. (1.78)The ship₁, the explosion damaged its₁ funnel.

c. (1.53)The ship₁, the explosion damaged the funnel of it₁.

(22)a. (4.00)That is John's cup.(Hornby(1975:3.89.))

b. (1.56)John₁, that is his₁ cup.

(23)a. (3.86)The boy's father is in the insane Asylum.(Fries(1940:VI.1.A))

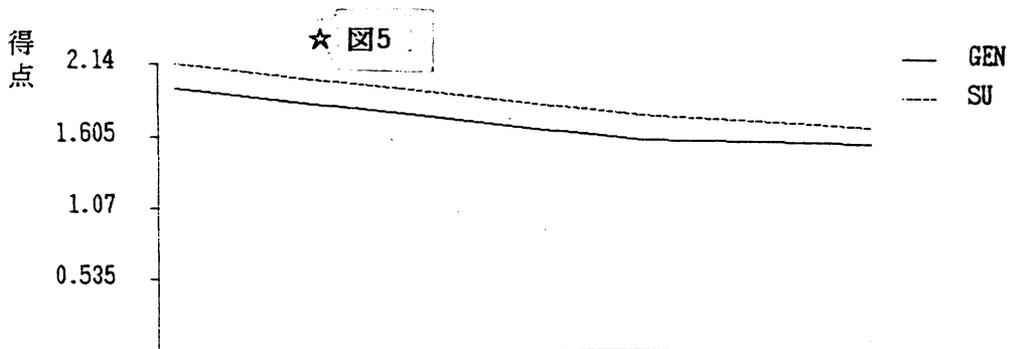
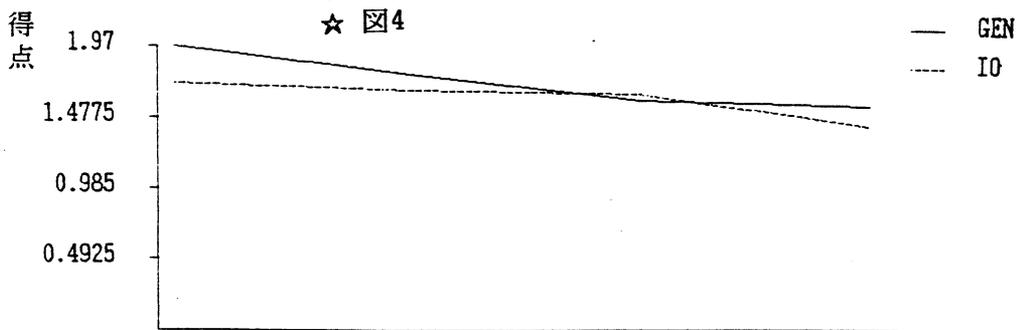
b. (1.60)The boy₁, his₁ father is in the insane Asylum. (註11)

(24)a. (4.00) I need my son's help now. (Fries(1940:VI.1.A))

b. (1.97) My son_i, I need his_i help now.

上のデータは一見して点数に相当ばらつきがあるように見える。しかし、得点の低いものには一定の共通点があるようにも見える。即ち、得点の低いもの((22b)と(23b))は、いずれも謂わば“A is B”型の構文である。この型の構文はthemeが主語として、rhemeが補語として表され、be動詞がcopulaとして両者を結付けるという構文である。つまり、theme-rhemeの構造が統語構造に明確に反映している構文だと言えよう。主語がそれらの文の themeとして既に確立しているために、主語以外に属格名詞句をthemeにした場合には、themeが重複することになる。このことが“A is B”型構文における低い容認性の理由であろう。従って、非関与的要因を排除するために、この“A is B”型の構造((22b)と(23b))は考察の対象から除かれるべきであるかもしれない。このことは、後で属格名詞句の平均得点を計算する際に考慮したい。

次に、(21c)において、s属格と呼ばれる語句の代わりに、それとほぼ等価であるofによる所有を示す前置詞句を用いてみた。すると、それに伴って容認性の得点が1.78から1.53へと低下した。このことから、hierarchyにおいて、属格名詞句の方が斜格目的語よりも上位に位置することが判る。また、hierarchyにおいて斜格目的語とほぼ同じ位置にあるこ



とが既に確認されている間接目的語と比べても、属格名詞句は上位に位置する（図4を参照）。また、図5のように属格名詞句は主語よりも得点が低い。従って、hierarchyは次のようになろう：“主語>属格名詞句>間接目的語, 斜格目的語>直接目的語”。

2.3.3. 比較名詞句からの左方転移

では、最後に比較名詞句からの左方転移を取り上げることにする。

(25)a. (4.00)John works harder than Harry.(Hornby(1975:5.95.))

b. (1.57)Harry₁, John works harder than he₁. (註12)

(26)a. (4.00)The new edition is less expressive than the old edition.(Hornby (1975:5.95.))

b. (1.64)The old edition₁, the new edition is less expressive than it₁. (註13)

(27)a. (4.00)This car is bigger than the garage.(Huddleston(1984:12.5.))

b. (1.61)The garage₁, this car is bigger than it₁. (註14)

(28)a. (3.86)I'm happier about it than my husband.(Quirk and Greenbaum(1973: 11.38.))

b. (1.67)My husband₁, I'm happier about it than he₁.

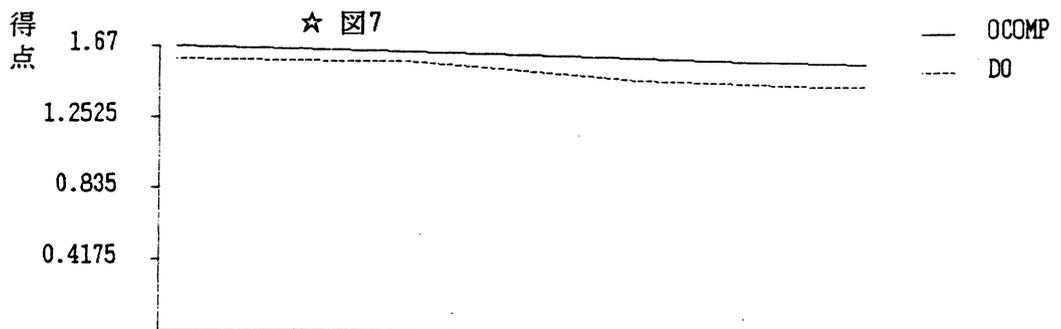
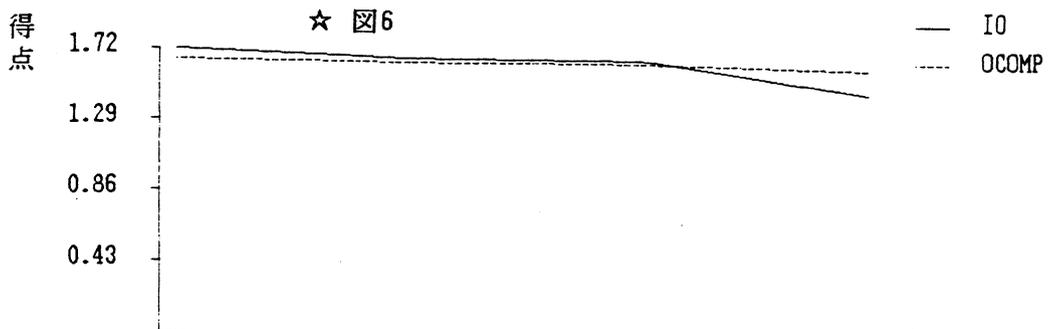


図6のように、間接目的語と比べた場合、比較名詞句の方が概ね、得点が低い。また、直接目的語と比べた場合、図7のように、比較名詞句の方が得点が高い。従って、hierarchyは“主語>属格名詞句>間接目的語,斜格目的語>比較名詞句>直接目的語”となる。

2.4. 調査結果

以上の調査結果をまとめたい。前節の最後にも述べたように、左方転移のhierarchyは次のようになる：

(29) 左方転移のhierarchy(I)

主語(SU)>属格名詞句(GEN)>間接目的語(IO),斜格目的語(OBL)>比較名詞句(OCOMP)>直接目的語(DO)。

このhierarchyは主に各例文の得点をグラフにし、そのグラフを読み取ることによって、作られたhierarchyである。その意味で直観的に作られたものである。これをhierarchy(I)とする。

上のhierarchy(I)を補う意味で、文法関係ごとに平均点を出して、それに基づいて、左方転移のhierarchyを調べると(これをhierarchy(II)とする)、次のようになった：

(30) 左方転移のhierarchy(II) (括弧内の数は平均点)

主語(1.90)>属格名詞句(1.73 [1.88])>斜格目的語(I) (1.67)>

斜格目的語(II) (1.65)>比較名詞句(1.62)>間接目的語(1.61)>直接目的語(1.53)。

既に述べたように、“A is B”の型の文では、属格名詞句に左方転移をかけると、themeが重複し、容認性が下がる。非関与的要因を排除するという観点から、この様な文を除いて、平均を出した方が望ましいかも知れない。そこで“A is B”の型の文を除いた平均値[1.88]を[]内に記しておいた(但し、比較名詞句にも“A is B”のタイプの文が多いが、その他の型の文と比べても、得点が高く、上の考えへの反例となる)。

hierarchy(II)をhierarchy(I)と比較した場合、hierarchy(II)において間接目的語が間接目的語より下位にあるという点がhierarchy(I)と異なっている。

とはいえ、比較名詞句(1.62)と間接目的語(1.61)との得点差は0.01点に過ぎない。この差異を捨象して、次のようにすることも出来るかも知れない：

(31) 左方転移のhierarchy(II')

主語>属格名詞句>斜格目的語(I)>斜格目的語(II)>比較名詞句,間接目的語>直接目的語。

hierarchy(II')において比較名詞句と同じ位置に置かれている間接目的語はhierarchy(I)においては斜格目的語と同じ位置である。ここで、間接目的語をなかだちとして、これら斜格目的語、比較名詞句、間接目的語を同じ位置にまとめてみよう：

(32) 左方転移のhierarchy(III)

主語>属格名詞句>斜格目的語,比較名詞句,間接目的語>直接目的語。

この様にhierarchyを4段階にしか区別しないのは行き過ぎだとする考え方もあろう。しか

し、斜格目的語、比較名詞句、間接目的語は英語において高度の類似性を持っているのである。間接目的語はtoやforなどの前置詞により斜格でもって表現することが可能である。もし、左方転移がtoの句から間接目的語への所謂与格移動(dative movement)に先立って、行われるのだとすれば、すべての間接目的語は斜格名詞句に従属させるべきであり、これと区別する必要がなくなる。また、英語の比較名詞句は、正確に言えば、埋め込み文内の名詞句の一つなのであるが、一見して、前置詞句のように見える場合が多い。Keenan and Comrie(1977:2.2.1.)によると、10才-12才の子供を対象としてrepetition testを試みた所、関係節形成に関して、“主語>直接目的語>間接目的語>斜格目的語,比較名詞句>属格”という順序で、想起(recall)され易いのだという(即ち、左の方に行く程、想起する際の誤りが少ない)。ここで、斜格目的語と比較名詞句が同じ位置にある。Keenan and Comrie(1977)は、the boy who Johnny is taller thanのようなthanのstrandingが、the boy who Johnny took the boy fromのようなpreposition strandingと同じ扱いを受けているのだと説明している。このように英語では斜格目的語、比較名詞句、間接目的語は一括して扱えるのではないかと考える。

3. 結論

3.1. hierarchyの解釈

前節で提案された左方転移のhierarchyの(I)・(II)・(II')・(III)のうち、直観に基づく把握と数量に基づく把握、及び(前節末尾で触れられたような)このhierarchyに関与すると考えられる幾つかの文法的事項を考慮して、本研究は、左方転移のhierarchyとして、hierarchy(III)を採用することとする。

これらはいずれもKeenan and Comrie(1977)のNP accessibility hierarchyとは大いに異なる。Keenan and Comrieのhierarchyの上位から2位に位置する直接目的語が左方転移のhierarchyでは最下位であり、Keenan and Comrieのhierarchyの下位第2位である属格名詞句が左方転移のhierarchyでは上位第2位に位置する。本来、関係節形成に関する類型論上の含意法則をまとめたものであるKeenan and ComrieのNP accessibility hierarchyが、英語の左方転移のacceptabilityのhierarchyとしても妥当性を持ち得るとする仮説は退けられることとなった。

さて、左方転移によって外置される要素は主題性を有するのだから、左方転移のhierarchy(III)は名詞句が主題性を担う可能性のhierarchyであると解釈することが出来る。即ち、hierarchyの上位の位置に立つ名詞句はより下位に位置する名詞句よりも主題性を担い易いものと考えられる。これを図に表せば、(33)のような関係となる：

(33) 主語>属格名詞句>斜格目的語,比較名詞句,間接目的語>直接目的語。

高←-----主題性-----→低

3.2. 問題点

このようにして、得られたhierarchyには、幾らかの問題点が残されている。それは主

に調査上の技術に関する問題である。本研究においては、hierarchyの同定の作業が極く限られたデータに立脚していた。例文や、インフォーマントを変えるか、あるいは、その数を増すことによって、結果として相当異なったhierarchyが生じる可能性がある。つまり、本研究の記述は、新たなデータに対して、正しい予測力を持つとは必ずしも言い切れない。従って、一層豊富なデータ・証拠によって本研究の結果を検証する必要がある。また、この調査結果を理論的に裏付けることも今後行われるべき課題であろう。

3.3. 結び

この様に、本研究において主題性の階層としての左方転移の階層が判明した。

左方転移のhierarchyは、名詞句の優位性の階層がそうであるのと同様に、文法関係に基づく階層である。文法関係は周知の通り、統語論のlevelに属する概念である。一方、主題は談話に関わる概念である。以上のことを考えるなら、本研究によって明らかになった左方転移のhierarchyは、文法関係と主題とを関係付け、統語論と談話との謂わば橋渡しの役割を果たすものと言えよう。

注

[注の番号は前回からの続きとなっている]

- (注9) 既に(注6)で述べた通り、不定名詞句の左方転移においては、itが残されると、非文になるので、ここでは、このような非関与的な要因を排除するために、残される代名詞としてoneを残すことにした。
- (注10) 念のために、“in it_i”の部分を“there”としてみた。点数では、1.69に下がった。
- (注11) 1人無効。35人で平均を出した。
- (注12) 1人無効。35人で平均を出した。
- (注13) “than it_i”の部分を念のために、“than that_i”に変えてみた所、1.47点に下がった。これはcopyされた代名詞の種類に関することで、我々の目的には直接には関与しない問題である。
- (注14) “than it_i”の部分を念のために、“than that_i”に変えてみた所、1.58点に下がった。これはcopyされた代名詞の種類に関することで、我々の目的には直接には関与しない問題である。

参考文献

- 荒木一雄(1986).『英語正誤辞典』:東京:研究社.
- Fries(1940).American English grammar:(復刻版.第3版第3刷:東京:丸善:1981).
- Hornby(1975).Guide to Patterns and Usages in English:Oxford:Oxford University Press.

Huddleston(1984).Introduction to the grammar of English:Cambridge:Cambridge University Press.

Keenan and Comrie(1977) "Noun phrase accessibility and universal grammar" :
Linguistic Inquiry,vol.8,No.1.

Quirk and Greenbaum(1973).A University Grammar of English:London:Longman.

Radford(1981).Transformational Syntax:Cambridge:Cambridge University Press.

Radford(1988).Transformational Grammar:Cambridge:Cambridge University Press.

安井稔(ed.)(1975).『新言語学辞典』:東京:研究社.